

# **第5次総合計画まちづくり市民フォーラム報告書**

平成26年7月5日（土）午後1時30分～4時  
河内長野市市民交流センター（キックス）4階イベントホールにて開催

## 1. 芝田啓治市長あいさつ

みなさん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました、市長の芝田啓治です。本日は、第5次総合計画まちづくり市民フォーラムに多数ご参加を賜りまして、誠にありがとうございます。みなさんのさまざまな想いを、河内長野の未来予想図として描いていただければ幸いです。

ご存じのように、今年は市制施行60周年となりまして、昭和29年4月に河内長野市がスタートして、ちょうど60年を迎えることができました。先人の努力、課題を乗り越えられ、今の河内長野があると思っております。4月6日から記念式典がスタートし、1年間、市民と共に祝う60周年でありたいということでスタートを切りました。5月11日には毎年やっている市民祭りがあり、そこでは、市民のみなさんの手作りで、6万5千人にご参加いただいたということで、多分、過去最高の人に集まっていただくことができました。また、市民の皆さん千人が市民パレードとして、千代田中学から寺ヶ池公園まで、大阪府警の音楽隊を先頭に、幼稚園の皆さんもパフォーマンスをしながら2キロ歩いていただきました。その次の5月18日には、河内長野では初めてになるかと思いますが、24台の地車が市役所の駐車場に集まり、キックスやラブリーホール前を通過して河内長野駅前までだんじりが連なりました。このときは市民のみなさん2万5千人がつめかけ、共に60周年を祝っていただき、本当に楽しい2週間を過ごすことができました。これを考えますと、やはり市民の力といいますか、「市民力」、また、だんじり等におきましては、それぞれの地域のみなさんの団結、つながり、絆を感じざるを得ませんでした。そういうことが、河内長野のまちづくりの細部にわたり、広がっているのかなと思います。

あと1つお礼を申し上げますと、「安全・安心な街ランキング」というのが毎年出されるのですが、犯罪発生率が最も低い、交通事故の発生件数が少ない、火災件数が少ない、都市公園の比率が高いという4つで、ここ数年、河内長野は33市の中で1位、近畿151市の中では5位という素晴らしい数字をいただいております。これもまさに市民力、地域力のおかげと思っております。

これからいろいろな意味で、第5次総合計画についてのご意見をいただくわけですが、根底にあるのは、やはり、市民の力、地域の力だと思っておりますし、そういう意味での基本形といいますか、本当に素晴らしいと思っております。是非、みなさんの思い、ベクトルを合わせていた



だき、素晴らしいまちづくりのため、平成28年にスタートするわけですが、河内長野の未来予想図をみなさんとともに描いていけたらと願っております。

最後になりますが、今日はこの後、大阪府立大学の増田教授のお話を伺います。その後、パネルディスカッションもありますので、お聞きいただきまして、参考にしていただけたらと願っております。どうか最後までよろしく申し上げます。ありがとうございました。

## 2. 基調講演「成熟型社会におけるまちづくりのあり方」

大阪府立大学大学院教授 増田昇氏

みなさん、こんにちは。ただいま、ご紹介に預かりました、大阪府立大学の増田です。今日のテーマですが、「成熟型社会におけるまちづくりのあり方」と掲げさせていただきました。これから第5次総合計画を考え、未来予想図を描いていく中で、今日の基調講演を参考にさせていただければと思っております。私の紹介として生命環境科学研究科という小難しい名前になっていますが、旧の農学部です。農というのは食料生産だけではなく、生物が持っているいろいろな現象から生命現象を解明したり、活用するという意味から、このような名前になっています。その中でも、緑地学、都市公園、あるいは、自然景観の保全などを専門にするとともに、都市計画みたいなことが専門です。それでは、これから約45分間、長きにわたりますが、ご清聴いただければと思います。皆さんのお手元にパワーポイントのデータをお渡ししていると思います。小さな字で申し訳ございませんが、見ていただければと思います。

### (1) まちづくりの時代的変遷

まず、先ほど河内長野は市制を引かれて60年という話がございました。戦後の戦災復興が終わって、1960年位から大阪大都市圏でどのようなことが動いているかとりまとめ、今置かれている我々の時代をどう認識したらいいのかということをお話したいと思います。

60年代は戦災復興が終わって、高度経済成長が本格化していくということで、都市へ人口集中が起こり、都市が外延的に急速に拡大するというので、河内長野の人口が増えたのは60年代後半から70年代にかけてかと思えます。特に60年代はどんなことが起こったかという、大阪は東洋のマンチェスターと言われ経済発展はしましたが、一方で、公害問題が出てきました。

70年代になると、泉北ニュータウンができたりしていますので、河内長野は少し遅れて住宅開発の動きが入ってくる時代になるかと思えます。それに伴い、郊外への道路整備、鉄道整備、都市内部がコンクリートジャングル化したと言われた時代でもあります。70年代に日本は何ができたかという、公害防除である一定の成果を發揮したというのが世界的に評価されています。大阪市内をみていると、我々が子どもの頃、今から50年位前は、大阪市域の上にきのこ雲がかかっており、今はものすごくそれがきれいになりましたし、道頓堀や淀川・大川などが、一定の水質に改善されました。先ほど地域力という話がありましたが、70年代の公害問題を端緒に、市民が行政に参画をしたり意見を出したりということで、市民参画の芽生えみたいなものがあるとも言ってもいいかもしれません。

80年代は、もう少し豊かな生活を求めないといけないということで、アメニティや、快適な生活環境という言葉が使われて、美しいまちづくりみたいな景観行政がスタートしていきます。



その後、大きく変わるのが90年代です。バブル経済が崩壊しました。ずっと右肩上がりと言われたものが平行になり、右肩下がりになっていくという時代が90年代です。このときに、成長型のまちづくりを終焉しないといけないということが言われました。産業構造もだいぶ変わって、都市の内部に工場跡地が発生する一方で、都市そのものは、産業の場ではなく、生活の場としてどうやって作り込んでいったらいいかが課題になってきますし、もう1つは、少子高齢社会です。2007年に日本の人口が下降し出すわけですが、当時言われた少子高齢社会の中で出てくるのは、リタイア後の自由時間の獲得であったり、あるいは、リタイア後の生きがいづくりが大きな課題になります。さらには、最近よく言われるのが、毎日のように異常降雨が発生したり、雹が降ったり、地球温暖化に伴う環境問題が顕在化してきました。これは、今までの産業型の公害とは大きく違い、我々が生活してエネルギーを使っているとか、車を乗り回していることが大きな原因で、地球規模での環境問題が形成されてきました。もう一方で、60年代・70年代の高度経済成長はどう言われたかという、新幹線の駅前型開発です。どこへ行っても同じような駅前、同じような街ができ、駅の看板を見ないとそこがどこか分からない。90年代になると、もっと地域に根差して地域の固有性とか、地域が持っている弱み・強みをきっちり踏まえて展開しないといけない時代になりました。あるいは、ほんまもんの時代と言ってもいいかもしれません。それに輪をかけたのが、1995年の阪神・淡路大震災です。その2年前に韓国で地震が起こって高速道路が倒れたとき、日本の土木技術では絶対にそんなことは起こらないと言われていたのに、43号線が倒れるというようなことが起こって、都市はぜい弱で、安全・安心というのは、これからうんとやっていかないといけないということで、90年代は大きくかじ取りが変わったと言ってもいいかもしれません。

21世紀に入り、成長型の都市づくりは終わり、成熟型の都市づくりと言われています。20世紀は、物理学、機械工学などが、まちや日本をけん引してきましたが、そうではなくて、農の時代、環境の時代、生態学の時代だと言われるようになりました。ただし、大きな問題として、大都市をどう縮退するのか、管理方式を変えるならどう管理していったらいいのか、農林水産業の後継者はどうしたらいいのか。そうこうしているうちに、東日本大震災が起こったんですね。そこで起こったことは、日本の過疎地域の10年後の姿を早回しで見せてしまったということが言われています。もともと農林水産業の後継者問題が起こっているところに、津波が押し寄せたわけです。都市部はあまり被災していません。復興が非常に困難を呈しているのは、復興の方法をどのようにしたらいいのか、復興しても戻って来るのか、産業を継ぐ人が本当にいるのかどうか、という問題が現れてきたのが東日本大震災です。今このような時代に我々はいるといことです。後で、こんな時代をどういうふうに取り組んでいったらいいのか説明したいと思います。

## (2) 河内長野市第4次総合計画について

お手伝いさせていただいた河内長野市第4次総合計画は、2006年から2015年に向けて作られたものです。時代背景を踏まえ、今でも通用するような部分があります。「調和と共生のまちづくり」「元気なまちづくり」「協働のまちづくり」ということで、みんなが主役になって「みんなで創ろう 潤いめぐる 緑と文化の輝く都市 河内長野」としており、これにどんな今の時代背景を加えていくのか、第5次総合計画では考えないといけないということだと思います。

第4次総合計画では、「環境調和都市」「共生共感都市」「元気創造都市」「安全安心都市」「自律協働都市」ということが謳われていました。これらを踏まえて、少子高齢化が急速に進んでいますので、元気な地域づくりがより大きな課題になってきたり、本当の意味での協働の仕組みというのを具体的にどう展開したらいいか、また、行財政はよく取り組まれています、まだまだ取り組まないといけない状況になると思います。このようなことが浮き彫りになってきたということだと思います。第4次総合計画のときにも、3つくらいの重点施策を掲げていました。

### (3) 成熟型都市のあり方 ～欧米におけるコンパクトシティ～

このような中で、ヨーロッパを中心に先進国では、成熟型都市に向けて何を考えないといけないかが議論されています。河内長野もそうですし、日本全国、あるいは、都市計画の分野でも考えられています。ここにありますように、「欧米におけるコンパクトシティ：9の原則」として、1つは、高い住居と就業などの密度。市街地エリアはきっちりと高度に利用しないといけない。ただし、環境の質は向上しなければいけません。もう1つ、現状では多様な用途が一定の範囲に含まれていないんですね。河内長野でいいますと、丘陵にある住宅地は、本当の意味での住宅地になっていません。タバコ屋さんもあれば隣に青果屋さん、薬屋さんがあるというような多様な用途が一定の範囲に含まれていないのです。日本の近代化は、分離して純化させていくことが目標にありました。その結果、純化し過ぎて、タバコ屋さんへ行くのに車で行かなければいけない街の構造になりました。もう一度どうやって混ぜたらいいのかを考えないといけません。もう1つは、生活の中で自由に歩き回れることが、大事になってきています。あまりにも車に依存し過ぎていますが、特に年を取ってくると最初に車が放棄され、公共交通に変わっていくわけですね。免許を返すようなことがあり、その後は、歩くという行為が最後までできるわけです。歩いてまちの中で生活できるようにするのが空間的形態の目標です。もう1つは、空間の特性ということで、後でその辺の議論になろうかと思いますが、生物学もそうですし、我々の生活もそうで、多様性というものです。若い世代から年寄りの世代まで多様な人が一緒に住んでいる。ある一定の世代ばかりが固まって住んでいるとか、一定の職業ばかりが固まって住んでいるということではなく、多様な居住者です。そういう多様性を、もう一度どうやって回復できるのか。もう1つは、先ほど言いました、独自の地域空間です。地域の中の歴史や文化、まちの中心という場所の感覚です。こういうものをどう取り戻すのか。さらに、明確な境界。あまりにも田園地域が都市部と混乱し、その辺りをどう自然環境に取り戻していくのかという議論がされています。これをやっていくためには、参加することが不可欠になりますので、社会的な公平性というすべての人が公平に参加できる、公平に生活できることが、参画の基本だと言われており、これからの地域を考えていく中で大切なことということが、欧米でも言われているんですね。日本と共通する課題と言ってもいいかもしれません。

そんなことを踏まえて、河内長野の第4次総合計画を作られたのですが、大阪府の都市計画やまちづくりの構成は、ほぼ同様のことを目指しています。「成熟社会における大阪の都市づくりのあり方」を第一にしています。これを作るのに参画をしたのですが、成熟社会の動向はどう捉えたらいいのかということと多様化するライフスタイルと都市へのニーズ、地域により異なる課題、これは後で説明しますが、河内長野も13校区ごとに各々違うというような、地域により異なる課

題が出てきます。人口減少、経済は低下していますので、経済の活性化に向けた取り組み、環境の保全。先ほど、安全・安心な街で近畿5位という話がありましたが、安全・安心な都市づくりは継続的課題、こんなことが言われていますし、河内長野は都市のストック、歴史的ストックが結構あります。こういう中で、これから作り込んでいくのに、どう使いこなしていくかを考えないといけません。「いけいけどんどん」で作るよりも、今ある施設や機能をどう使い込むのか、どう使いこなしていくのか。こんな議論がされてくると、大阪といえども、ふる里としての誇りであったり、既存ストックの活用、緑や水との関係ということを大事にした環境形成、このあたりが基本になります。首都圏と大きな違いは、大阪は、20分もあればどこの山にも行けます。生活していると、どこかに山が見えます。東京で生活をすると山が見えないから方向が分からないし、不安で仕方がないですが、大阪はこんな特徴を持っているということが議論されています。

特にコンパクトシティでは、日本型のコンパクトシティ、先ほど、ヨーロッパでのコンパクトシティという話をしましたが、日本型で見るとどうなるかということ、小学校区と言ってもいいかもしれません。近隣生活圏で都市を再構成するベースは、やはり校区だと思います。そういう段階的な圏域や地域を考えなければいけません。もう1つは、交通と土地利用の結合を強めるというのは大きな課題で、どこも駅前の衰退というのが結構あります。本来は駅に一番人が集まるわけですから、都市としての機能をどう高めていくのか。エッジシティみたいな形でどんどん高速道路のところの人々が住んでいく話ではなく、やはり本来の交通と土地利用はもっと結合するように強めないといけない。あるいは、駅前のセンターゾーンの機能をどう高めていくか。こんなことが大きな課題になってくると思います。

もともと日本の町割りは、徒歩をベースにしていたので、その町割りを生かす。先ほども言いましたように、純化されすぎた機能を、上手く混ぜ方を考えて、その中で生活ができることを考えないと、ということが言われています。当然、生活していく中では美しさとか快適さ、自然との共生ということが重要になってきます。こんなことが言われているんですね。都市を強化するとか、体制的な問題として都市経営をどう考えていくかということです。

#### (4) 変革の動向（成長型社会から成熟型社会へ）

今、こんなことを背景に、成長型から成熟型へ変わっていくときに、どんな視点で見直してみたらいいのかということ、私なりに考える視点をまとめました。

1つは、環境重視型社会ということで、循環型や生物の多様性の保全、低炭素型の都市や持続可能なエネルギーの問題などを考える。特に、エネルギーは分散的なシステムにどう転換できるのか、あるいは、低炭素型都市は、要するに石油や電気の消費量を極力減らしたいというものです。もう1つは、人間が主役になって、健康、安心、歩いて暮らせるというのがキーワードになってきます。協働の視点で、市民だけではなく市内企業も含めた企業市民と行政がパートナーにならざるを得ない。地方分権型社会について、地域アイデンティティというのは、地域らしさです。これを引っ張って、地域のブランド化へどう高めていけるのか。後でこれも議論になろうかと思いますが、河内長野の固有性をどういうふうにブランド化していったらいいのか、河内長野産をどのようにしてブランド化していったらいいのか。それは地域愛につながったり、シビックプライド、河内長野に住んでいる誇りにどうつながっていくのか、良いところに住んでいるとい

うところへ、どうつながっていくのかというものです。もう1つは、ライフスタイルは変化していくものであるということ。我々の世代は、ワーカーホリックみたいに、郊外から都市部へ働きに行き、自分の住んでいるところにはほとんどいない。いるときは休養しているだけという時代から、今、ワークライフバランスと言われて、地域でどんなふうに生きがいがづくりができるか、生活を楽しむとか。もう1つ大事なのは、学びの多様化です。生涯学習みたいな形で、学校教育を受けるような学びではなく、学びの多様化にどう対応していくのか。一生いろいろな学びの欲求はあるので、それにどう対応するのかということです。あるいはストックの活用、環境資産の蓄積、コンパクトシティという話の中では、環境管理的な条例なども作られました。

農地法が改正されて管理部分が出てきます。土地建物の管理責任は、これからどう考えていったらいいのかということが、実際に都市で起こっています。特に、農林水産業の持続性の確保、後でお見せしますが、河内長野市の持っている強みであり弱みは、かなりの部分が森林に覆われていることです。その持続性をどう確保するか。さらに、安全・安心のまちづくりですが、その中には、当然、南海トラフの地震に対する減災という考え方と、もう1つは防犯。この安全・安心なまちづくりは、たくさん防潮堤をつくったり、避難広場をつくっても、それよりも大事なのは地域コミュニティを強化し、地域力がないとそれは機能しません。あるいは、マネジメント型社会へ転換し、物をつくる時代から使いこなす時代へ転換していく。こんなことを考えて、第5次総合計画を考えましょうという考えるきっかけみたいな仕組みを整理させていただいたということです。今の時代的背景、社会的背景の中から出てくるのはこういう状況です。そういう話の中で、第5次総合計画の策定方針は、こういうふうにお伺いしております。市では、時代潮流に対応した総合計画、経営の視点を重視する、市民とともに作る、市民に分かりやすい総合計画をつくる、ということが言われています。まさに、先ほどの時代背景の中で、こういうことをきっちり踏まえて、それに対応する総合計画をどう作ったらいいか。期間は、10年間を想定されているということです。

このような話の中で、社会的な背景とともに、我々が住んでいる河内長野は、どういう状況にあるのか、これをきっちり踏まえないといけないということです。田畑、山林が多くを占めています。宅地はわずか40%です。大阪府全体としては、確か、森林は30%くらいしかないんですね。それに対して、河内長野市も3割ですが、田畑も含めて自然エリアが6割あります。ただし、20年から比べると徐々に減っている状況にあるということは確かですが、その資産をどう活かすのかというのが大きな課題です。さらに、河内長野の特徴は岩湧山、あるいは和泉山脈や金剛山という山並みを背景に持っている。そこから河川が流れてくる。こういう空間の構造をしていて、市街地から山が身近に見える、そういうところは大きな意味を持っています。

もう1つは、歴史的な発展です。図の濃いところは旧集落で、だんだん薄くなるごとに新しい年代に開発されたという重層的な歴史が積み重なっています。山間部の集落は濃いですが、このあたりに、旧市街地を取り囲むような丘陵に新市街地があります。こういう特徴をどう考慮して計画を立てていくのか、あるいは、土地利用上の特性を持っているというのが課題だと思います。

第4次総合計画を作ってからどんなことが起こったかという、一番大きな動きは人口です。平成18年の人口は11万7846人、世帯数は4万5千7世帯というのが、平成26年では、6千人余りが減少し、34年には10万人になるということが予測されています。この人口減少

をどう受け止めるのか。日本全体もそうです。1億3千万人から減少し、1億人を維持するためにどうしたらいいかということは、新聞にも載っていますが、この辺の人口減少をどう考えていくのか。その中で、高齢化率が約3割、大阪府内の平均からするとちょっと高めです。日本全体の平均もだいたい25%くらいですから少し高めです。34年になると35%ということです。2025年問題みたいなことになりましたが、高齢化の進捗についてどう考えていったらいいのか。これはまさに、元気にどう過ごすことができるかという裏返しでもあろうかと思えます。校区は13校区あると思いますが、校区によって開発されてきた、あるいは、市街地が形成されてきた歴史が違います。天野小学校区や天見小学校区は4割近くの高齢化率、それに対して、千代田小学校区や楠小学校区や長野小学校区は25%ということで、校区によって状況が違います。今回の総合計画では、地域別で議論をされ、地域別の計画づくりをしようと市長からお聞きしておりますが、こういう地域の特性に応じてどう考えていったらいいのかということが、これからの課題になってくるのではないのでしょうか。

もう1つは、財政を見直され、改善されてこられました。さらなる改善に取り組まないといけない状況です。これは、平成25年度時点で財政見直しをされたときの表で、かなり努力をされてこられました。

こういうことを踏まえながら、我々はこれから考えていきたいと思います。後ほど、ご報告があるかと思いますが、市民ワークショップの提言がまとめられています。その頭書きで、素敵だと思ったのが、河内長野の特徴は自然環境や多様な歴史・文化ということと、元気な高齢者の活力をまちづくりに還元するという、アクティブシニアみたいな言い方がされています。それと市民、地域、事業者、行政が、共有すべき目標を共有しながら進むという提言が出されています。中身は後でご報告があると思いますが、こういう基本的な考え方が示され、この線に沿って我々は議論をしていくということだと思います。

最後ですが、これからまちづくりを考えていくときに、一般論に戻って、世界的、あるいは、日本の中で今こんなことが考えられているということをお話します。「サステナブル・デベロップメントの3つの要素」、1つは地域協働社会というのがベースになっています。地域協働社会とは、基本的には、従来までの地縁型のコミュニティと、福祉や自然保全などテーマ型のコミュニティを両方含めたコミュニティというのが重要です。もう1つは、エコロジカルな開発ということで、環境との共生が大事です。さらにそれを支えるための地域経済、あるいは、都市経営をどう考えていくかということが一番厄介です。後で、河内長野をどうやって元気にしていったらいいのかという議論をしたいと思いますが、この辺の経済の開発。1つは、農の拠点が設置されるとお聞きしていますし、「奥河内」の売り出しもされていますが、観光や交流から地域経済をということで経済を動かす。

もう1つは、河内長野が持っている特性は、まさに、田園の中の町というところを徹底的に強みとしてどう活かせるのか。それをやるためには、よく言われるプラットフォーム。いろいろな方々が1つのところ集って議論し、情報共有、情報を交換する。例えば、ここにプラットフォームがあって、専門家、企業、市民、市民団体、林業者、山林所有者、国、府、市など、こういう多様なステークホルダー、そういうプラットフォームでどんな議論ができるか。プラットフォームの語源は駅のプラットフォームです。駅のホームで知人や旧友と会います。そこで会うと必ず元気にして



いるかとか自由に情報交換をします。それだけではありません。意気投合してお互いに時間があれば、改札を出て飲みに行ったり、お茶をしに行ったりするという行動の起点になる。ということがプラットフォームです。情報交換ができるという話だけではなくて、そこが何らかの活動の拠点になって、活動が展開していく場というのがプラットフォームで、これからのまちづくりは、そういうプラットフォームをどうつくるか。そして、みなさんが参加するときには、みんなウィン・ウィンの関係で参加してほしい。ボランティアとして自分が与えるばかりでは疲れてしまうんです。私なんかも、いろいろなところでまちづくりだとかお手伝いするときには、自分の持っている知識をみなさんに伝授しているだけではないです。自分の考えていることが実際に社会の中で本当に役に立つのか立たないのか、そういう社会実験から学習させてもらったり、学生の学習の場として利用させていただいたりというウィン・ウィンの関係で地域と付き合っているんですね。そういうことを考えてほしい。プラットフォームへ行ったからといって、与えるだけではなくてウィン・ウィンの関係で連帯しよう。

例えば、既に7つのまちづくり協議会ができたとお聞きしていますが、校区ごとにまちづくりのラウンドテーブルみたいなものが出来て、そこには従来までの自治会、あるいは、NPO、ボランティア、企業、各種機関、専門家などが入って、地域ごとにプラットフォームなりラウンドテーブルなりができ、まちづくりが実際運用されていく。こんなことを、是非、考えていただきたいなと思います。これをやるときには、あまり難しいことは考えずに、アダプティブマネジメントと書いていますが、目標をまず皆で共有します。具体的に実施してみます。そして、やってきたことの成果を定期的に検証してみる。それで上手くいったらいいんですが、上手くいかなかったら、ちょっとやり方を変えてみるという、PDCAとか進行管理ということが言われています。多分、今回の総合計画の中でも、成果指標、進行管理をするための目標指標は大きな議論になると思いますが、そういう進行管理のための指標があって、歩きながら考えていきたいと思います。いろいろなところで言われています。箕面市の総合計画をお手伝いしたんですが、今までみたいに右肩上がりでずっと一気に良くなることはない。スパイラルアップでちょっとずつ良くなっていく。ぐるっと一周回ったらまたそこでチェックをして、徐々にスパイラルアップしていく。こんな考え方で気楽に順応的にやっていきたいと思います。こんなことが、これから考えていく中での1つの目標かなと思っています。

非常に雑駁になったかもしれませんが、私に与えられているのは2時20分までです。これから計画を考えていく中でのヒントになればということで、話題提供させていただきました。どうもご清聴ありがとうございました。

### 3. 市民ワークショップ結果報告

#### 「河内長野市を“もっと”元気に！河内長野市の未来予想図」

《発表者》

市民ワークショップ参加者代表：林 真理子氏

林：こんにちは。林真理子です。よろしくお願いします。河内長野市は平成28年に、その後の10年間のまちづくりの基本計画、第5次総合計画をスタートさせます。第5次総合計画をつくるときには、まちの将来像について、市民の生の声、想いを取り入れてもらいたい、私たち市民の想いをまとめたものが、今回報告する市民ワークショップの提言書です。これをきっかけに市民のみなさんの第5次総合計画に対する関心が広がることを願っています。提言書を作成したのは、ご紹介にありましたように、広報誌の公募に応じた市民49人のチームです。20代から80代までの幅広い年代が参加されました。チームに河内長野市から与えられたテーマは、「河内長野市を“もっと”元気に！河内長野の未来予想図」です。1回目のスタートアップセミナーでは、河内長野市の現状を教えていただきました。それをもとに、参加者それぞれの経験や考えに基づいた想いを出し合って、検討を重ね、提言書をまとめ、4月に市長に提出いたしました。参加者は、希望する5つのテーマごとのグループに分かれ、河内長野市の強み、魅力と、弱みの課題を出し合うことから始めました。そして、目指すべき将来像を定め、それを実現するためのプロジェクトを考えました。次に、グループごとの提言の中身をご報告いたします。



環境・景観グループが河内長野市の将来像として据えたのが、「みんなでつくる ほんまもんの環境・景観のまち」です。河内長野には、豊かな自然や文化財、きれいな水や空気など財産がたくさんあります。時間的ゆとりのある人が多いという強みもあります。これを活かし、住む人にとっては住むに値する、訪れる人には喜びや心地よさを与えることができる、「ほんまもん」の環境・景観をつくろうという提案です。

“ほんまもん”の環境・景観をつくるための方策は、「1 “ほんまもん”の形成」。市民は、自然保護の活動や川の清掃、蛍の放流などのボランティア活動に主体的に参加し、地域・事業者は、水源の森をつくるなど、遊休農地の活用に取り組む。行政は、環境・景観を地域資源としてまちづくりに活かすなど、河内長野市を挙げて、環境・景観を守るだけでなく、活かすという視点を持って取り組んでいきます。「2 “ほんまもん”の協働」。「自分のこととして」がキーワードです。より美しい“ほんまもん”のまちをつくるために、自分たちで自分たちの自然や景観を守ります。市民ボランティア、地域、行政は、“ほんまもん”づくりを「自分のこと」として協働で行います。これによって、まちづくり全般への市民参画が広がることを願っています。「3 “ほんまもん”のPR」。こうしてつくった“ほんまもん”の環境・景観の魅力を、市民だけでなく市外の人にも知ってもらうために、そして、その価値をもつ

と高めるために、市民、地域、業者、行政、みんなで意識的に発信していきます。また、いろいろなところで成功している例をみんなで共有して、取り組みのレベルアップにつなげます。

福祉・健康・スポーツグループが、河内長野市の将来像として据えたのは、「あなたもわたしも集まろう」という柔らかなキーワードです。昨年9月に河内長野市が行ったアンケートで、「河内長野市がどんなまちになってほしいですか？」という質問に、54%が「高齢者や障がい者が安心して暮らせる福祉の充実したまち」と答えたそうです。福祉・健康・スポーツグループは、河内長野市をもっと元気にするためには、「福祉の充実したまち」になってほしいとお任せするのではなく、他人事でないわたしのこと、あなたのこととして取り組もうと呼びかける視点が大切だと考えました。そこで、「あなたもわたしも集まろう」を具体化するプロジェクトが、この3つです。さっき先生がおっしゃったプラットホームというようなことだと思います。「1 集まって助け合い」。住民の孤立化が進んでいます。それを防ごうといろいろな組織が活動しています。組織をつなぎ、情報を活かすことが大切です。しかし、組織化だけでは、一人ひとり豊かに暮らせません。隣近所であいさつをするなど、人々の関わりをつくり、ひいては人々がお互い様と助け合える環境をつくっていくことが大切と考えました。「2 集まろう居場所づくり」。人と人のつながりをつくっていくために、世代や立場、障がいなどを越えて、誰でもが集まれる場所や機会をたくさんつくっていきます。町会や自治会の班会など身近な範囲のテコ入れも大切です。「3 定住促進」です。河内長野市では人口減少が心配されています。住みたいまちにするために、福祉・健康面に力を注ぎ、特色のあるまちにしていく必要があります。また、福祉と働くこととは切り離せない関係です。年を取っても障がいを負っても、誰もが働ける場所、役割を担える場所をつくっていくことが、元気で長生きの元だと考えました。

教育・歴史グループの未来予想図は、「育てる力のあるまち」です。場所や環境が充実すれば人は育つ。環境は、人を育てる水や肥料です。河内長野が持っている強みを集めて、人を育てる力にします。「育つ場づくり」プロジェクトでは、誰もが主体的に学べる場所や機会をつくります。郷土愛や生涯通じて学ぶ喜びを持った人、地域の課題に気づいて対応できる人が育つためには、さまざまな地域の資源、環境を活用して人を育てる場と仕組みが必要です。人が育つためには、人や情報、仕組み、教材、場所、コミュニティやつながり、生涯学習、また、自然環境など、周りにいろいろなものが必要です。河内長野市が教育立市を掲げているのも大きな強みで大切な資源です。こういうものについて、良い情報がどんどん集まって利用できるようになっていくと、どんどん良い人材が育っていきます。河内長野には、いろいろな知恵を持った人材や組織、豊かな自然や歴史文化という強みがあります。「情報の見える化」プロジェクトでは、河内長野にもともとある良いものをどんどん見つけていこう、みんなの役に立つものにしていこうというプロジェクトです。地域に点在する情報を積極的に発掘・発信し、誰もが見える情報として共有します。そして、一方通行でない市民参画やコーディネートなどの仕組みや体制を整え、共有した情報が活用できるようにして、市民相互のつながりを強くしていきます。それが、「育てる力のあるまち」になります。

商工・農林・観光グループが描く将来像は、「ゆっくり、のんびりできる観光のまち」です。

河内長野市の魅力、強みといえば、金剛寺や観心寺、高野街道など歴史や文化に彩られた観光資源が豊富なこと、日本の原風景である里山も豊富で郷愁が味わえること、登山やハイキング、川遊びやサイクリングなどでさまざまな自然を経験できること、なんばから30分と近く、気軽に来てもらえることなどが挙げられます。「ゆっくり、のんびりできる観光のまち」をつくるために、ポイントを3つ考えました。「1 土地利用」。河内長野市の6割が山間地です。これを活かして観光の魅力にするために、農業者と連携して休閒農地の有効利用を図ります。しかし、高齢化等で、農林業の継続が難しくなっているという現状があります。そこで、農業者と市民等が協力して、農地を観光活用したり、休閒農地をグランドゴルフ場や自然エネルギー設備に転用するなど、農地以外での利用を検討する必要があります。「2 駅前活性化」。河内長野駅は、南海と近鉄電車両方が乗り入れていますし、金剛山などへの観光客の利用が大変多い駅です。河内長野駅の周りを観光のまちにふさわしい観光の拠点としていくことが必要です。もっと観光のまちにするように、市民、地域、事業者、行政が関わり合いながら方策を検討します。駅前活性化に向けた市民主体のプロジェクトづくりや市民フェンドづくりも視野に入れます。「3 特産品の開発と販売店の増進」。お土産というのは観光の大きな楽しみですから、市民目線の特産品コンテストや奥河内のネーミングを活用するなど、市の商業や産業の活性化のためにも、地域資源を活かした特産品の開発と、それを販売する施設の充実を図ります。

安心・安全・都市基盤グループは、未来予想図を「子ども・若者・高齢者が安心して暮らせるまち」と描きました。目標は、「歩いて暮らせるまち」、「安心・安全な暮らし」です。すべてのまちづくりの根幹は都市計画ですから、歩いて暮らせるまち、安心・安全な暮らしのできるまちづくりを基本理念とする都市計画をつくらなければなりません。今の私たちの暮らしは、公共交通機関が十分でなく、車がなければ生活できない毎日です。車中心の生活から歩いて暮らせるまちへ、身近なところで生活が賄えるようなコンパクトなまちづくりに転換していく必要があります。そして、安心・安全な暮らし。子どもや一人暮らしの高齢者など誰でもが安心して共に暮らせるまちづくりのため、自治会を起点として、地域ぐるみで防犯・防災体制を整え、見守り活動など生活支援をしていきます。このためには、元気な高齢者の力を活用します。今、述べたようなまちをつくるための「都市計画の基本理念」は、今までの河内長野市のまちづくり計画の丁寧で大胆な見直しと問題の洗い出し、少子高齢化・低経済成長社会をベースにした都市計画、そして、まちづくりのための財源の積極的な確保です。先ほど述べた都市計画の基本理念を基に、安心・安全・都市基盤グループは、市民の立場から次のような都市計画が立てられることを期待しています。「1 住民が、町内で日常生活を完結できるベッタウンの整備」、「2 今後の宅地開発におけるシビルミニマムの整備とミニ開発の規制」、「3 豊かな自然や歴史・文化遺産などの積極的な位置づけとその活用」、「4 民間活力の発掘および外部資金の導入」、「5 PDCA（計画・実行・評価・改善）の徹底とムダの排除」です。

これら5つのグループが、河内長野をもっと元気にするための方策を次のようにまとめました。

「河内長野市の魅力である恵まれた自然環境や多様な歴史・文化を活かし、活性化する方

策が必要」。守るだけでなく活かしていく視点が大切だと思います。

「高齢者の豊かな知識や経験、若者の発想力や行動力など、さまざまな立場の力をまちづくりに活かしていく仕組みが必要」。同時に、生活弱者、交通弱者、外国の人等いろいろな人たちが河内長野に存在するということを前提としたまちづくりが必要です。

「様々な取組を市民・地域・事業者・行政等が互いに協働で進めながら、より良い河内長野をみんなで目指していくことが重要」。市民の自主的・自発的な取組や自治会・町会といった小さな単位の重要性もワークショップでは取り上げられました。

今回の提言は、「河内長野市をもっと元気にするため」の将来像と、それを実現するためのプロジェクトという形でまとめました。今後は、これらの趣旨やポイントを踏まえながら、第5次総合計画に活かしていただけますよう、よろしくお願いいたします。

提言書の作成に参加した49人は、河内長野市の現状に対して、未来に対して、いろいろな想いを持って集まりました。そして、今までお会いしたことのなかったみなさんとワークショップを繰り返し、いろいろな方々のいろいろな考えに出会うことで、河内長野市とそこに住む仲間のみなさんに、もっとたくさんの関心と共感を持てることに気がきました。今日、この場にお集まりになったみなさんにも、是非、河内長野市と私たちの将来について、一緒に考えていただけたらと思っております。本日はありがとうございました。

#### 4. パネルディスカッション「みんなで創ろう！いきいきしたまち、河内長野」

《コーディネーター》

増田 昇：大阪府立大学大学院教授

《パネリスト》

水谷 邦子：市民ワークショップ参加者

松本 拓久：河内長野市商工会青年部部長

大谷多美子：河内長野小学校区まちづくり会議

吉村 禎二：河内長野市社会福祉協議会会長

芝田 啓治：河内長野市長



増田：それでは、これから、4時を目標にパネルディスカッションをしていきます。先ほどご紹介にあったように、これから5次総合計画を進めていく中で、どのようなことを考えていったらいいか、それぞれのお立場の違う方々から、話題提供を少しいただき、その中から何点か論点を引っ張り出して、自由討論を進めてまいりたいと思っております。時間の関係で、会場からご質問が取れるかどうか、甚だ不安でございますが、ご質問、あるいは、ご意見等がございましたら、皆さんの資料の中にアンケート用紙、意見書みたいなものがございますので、是非とも書いて提出いただければと思っております。

それでは、まずは、市長を除いて4人のみなさんから、今まで河内長野の中でどんな活動をされてきたかという自己紹介といえますか、活動内容の紹介とともに、今回の総合計画に期待するものを話題提供いただいて、議論を深めてまいりたいと思います。吉村様からご発言をいただければと思います。よろしく願いいたします。

吉村：初めにお断りしておきたいのですが、福祉の課題についてお話させていただきますが、福祉といった場合、地域、高齢者、子ども、児童等の問題があると思いますが、時間の関係で高齢者を中心にお話させていただき、後ほど、討論の中で障がいの問題とか、時間がありましたらお話させていただこうと考えております。河内長野市には、15地区の福祉委員会がございます。現在、ボランティアとして福祉委員・役員、あるいは、協力委員として全市で900名近くの方にいろいろな形でご協力をいただいております。その900名



の年齢層は、おおまかに50代から70代の人が圧倒的な層を占めております。50代から70代の方は、10年前の16年には3万6千人ほどおられました。現在は3万3千人ほど減って、3万3千人ほどしかおられません。先ほどお話ありましたが、10年後の36年には、なお4千人近く減って2万9千人くらいになってしまう。だから、地域の福祉を担う方々、現在と同じように50歳から70歳になると、担う人の人数が少なくなります。一方、介護保険関連のアンケ

ートデータによりますと、75歳を超えると介護保険における要介護、あるいは、要支援の認定を受ける方が急増します。そういう中で、私ももうすぐ75歳になるんですが、今まで元気だったものが急に身体に変化を起こすという1つの目安になると思います。75歳から80歳までの年齢を見ると、平成16年には4千人余りおられます。現在は5千900人くらいになります。36年度になると8千200人近くになると予想されております。ということは、地域で福祉を担っていただく方の人数が減る。一方、何らかの形で福祉の支援を受ける方が増えるという状況になることが予想されます。この中で、1つは、福祉委員、あるいは、役員の方をどのようにして増やしていくかという大きな課題があります。現在は900人近くですが、私の個人的な考えとしては、最低、今の1.5倍の1,500人程度の協力を得る人を確保しなければならないと考えています。けれども、先ほど言いましたように、担う年齢層がどんどん減っていく状況にある中で、どういう問題が起こるか。今、各地区、あるいは、各校区の福祉委員の方が努力されて、いろいろな取り組みをさせていただいていますが、その取り組みが思うようにできない、見守ったり声かけをすることの負担が、より重くなるということがあります。そして、地域におきましては、最近でも、ふれあいサロンとかいろいろなサロン活動をしていただいておりますが、会場が狭くて思うような支援ができないという状況が生まれつつあります。15年後になると、支援を受ける方が増える中で会場の問題があります。そういうことについて、どう考えていくのかということが大切になるんじゃないかなと思います。また、5年計画、後期計画に関係なく、各地域では自治会、あるいは、老人会、まちづくり協議会、子ども会、ボランティアグループ、子ども見守り隊、防犯・防災など多くの組織の方々が、10年先をみた総括的な取り組みが始まっております。そういう中で、そういう人たちの取り組みに意図しながらやっていく必要があるんじゃないでしょうか。また、ここに市長さんがおられますが、私らも含め行政は縦割りだという言葉をよく使います。例えば、福祉のことは福祉のところへ行かなければいけないという、横のつながりがないということがありますが、同じようなことが各地域でも起こることが、今のままでいったら考えられます。より効率的に、計画的に物事を進めていくためには、地域も含めて横のつながりを大切にしていかなければならないと考えております。ただ、あまりにも1つにまとめてしまおうとすると、それぞれの組織が持っている良さが活かされないということもあろうかと思っております。そういう点も配慮しながら、横のつながりをより一層強めていかなければならないのかなと考えます。今後に期待することですが、1つは、医療、介護、福祉が1つの建物の中に収まるような、総合福祉会館を建設する必要がある。現在、市役所へ相談に行かれて、それは社会福祉協議会へ行ってくださいというようなことが起こったとすると、交通機関が非常に不便なところに社会福祉協議会があります。そこで相談して、また市役所へ戻らなければならないという、実際に弱者の方々が困っていることはたくさんあります。そういう意味で、総合福祉会館を建設する必要があるんじゃないかなと思います。なお、将来に対することですが、若者に聞くと、河内長野の駅で降りて、ここで生活したいというような夢とか希望が持てないということが、よその県や市から見たらあります。例えば、北野田まで行きますよね。北野田で降りたときには、それなりの良さがあるけれども、河内長野で

降りたときには、そういうものが見えません。実際に住んでみた場合には、良いところはたくさんあるんですが、そういう声を何回かお聞きしました。そういう点では、駅前をどう開発していくのかという問題が1つある。もう1つは、先ほど出ておりましたが、歩くまちづくりももちろん必要ですが、私は南花台に住んでおり、南花台や大矢船の人がここへ来るときには、三日市、あるいは、長野駅へ出て、それから歩くかバスを使って来なければなりません。南花台や大矢船の人が一本でここへ来られるような交通機関、また、高齢者の方は自動車を手放すようになっておっしゃいましたが、そういう点でも必要かなと思ったりしています。時間がありませんので、ここで一旦終わりにしたいと思います。

増田：ありがとうございました。福祉、特に高齢者の視点からということで、後ほどの議論にもなってくるでしょうが、担い手の確保、かつ、活動の場の充実はどこをどう考えるのか。これはひょっとしたら、後のフリーディスカッションの中での論点になってくるかと思えます。もう1つは、駅前、ひいては河内長野の持つ魅力性をどういうふうに出していったらいいのか。これも後で、皆で議論したいと思います。どうもありがとうございます。それでは、引き続きまして、大谷様、よろしくお願ひしたいと思います。

大谷：私ども長野小学校区のまちづくり会議は、平成23年7月に設立いたしました。地域で活動いただいている団体、企業、個人、誰もが参加できる組織づくりとして発足いたしました。多くの施設や歴史・文化、そして多様な人材など豊富な資源があふれているところです。この資源を、私たちの目指す、人にやさしいまちづくりに活かしていただくために、一人ひとりが互いに理解し、協力し合いながら、つながりを連携すること



とだと思っています。そこで、私たちは、3つの方針をつくり、将来を担う子どもたちに夢をつなげていきたいと願ひ、愛称を「～ゆめ・街・ながの～」としました。その1つの方針は、「河内長野の玄関口として魅力ある新しいまちづくりの推進」です。社会福祉協議会会長さんがおっしゃっていましたが、昔のような活気がなくなっていることに私たちも心を痛めております。河内長野らしい玄関口としてふさわしいまちづくりを目指したいと思っています。2番目は、「ふれあいのある、やさしさと活力のあるまちづくりの推進」です。地域に住む人々がスポーツ活動や歴史、文化、伝統の学習、イベントの実施などを通して、子ども、障がいのある人、そして、高齢者まで世代や立場の違いを超えて、やさしさと活力があふれ、安心してふれあえるまちづくりを目指しています。3番目は、「安全・安心で快適に暮らせるまちづくりの推進」です。災害時に地域ぐるみで助け合えるまちづくりを推進するため、安全・安心に関する意識を高める取り組みを行います。この3つの方針を少しずつ3年の間に取り組んでまいりました。私たちの願ひであった、駅や駐車場から商店街へ行くというのも、ロータリーに屋根ができましたし、少しずつ、子どもさんを連れた買い物にも駐車場からの移動ができるようになりました。しかし、活性化という



点では、少し淋しいと思っておりますので、これから、まちづくりのほうでもどのように皆さんと一緒に協力してやっていけるかというのが今の課題になっています。それから、2番目のふれあいですが、青少年課との協力で、夏休みには、夏休み子ども教室の「むかしあそび」、これは、まちづくりの役員さんたちだけではなくて、市民の皆様にも協力していただいて、大変盛り上がっています。3番目の安全・安心ですが、連合自治会のみなさまが、子どもの見守り活動を何十年も続けていただいております。それぞれの地域では、防災活動も盛んです。今年の3月に避難訓練を、校区で初めて全員参加していただくということで防災訓練をしました。障がいのある方はもちろんのことですが、子どもさんを連れた若いご夫婦にも参加していただき、450名の方に参加していただき、前向きに進んだかなと思っております。いろいろと心配はありますが、また後ほどお話をさせていただきたいと思っております。

増田：ありがとうございました。1つ教えてもらいたいのですが、まちづくり協議会は、地域の中にあるいろいろな組織の代表者が参加しているということをお聞きしたのですが、どんなメンバーが入られているのでしょうか。

大谷：外国の方がたくさんいる国際交流会、子ども会、学校のPTAのみなさん、中学校と小学校も校区内にあります。それと、全部の連合自治会のそれぞれの方、入所施設がありますので福祉関係の方たち。一応くまなく全部という形になるでしょうか。点が線に繋がってきたかなと思っておりますので、平面が立面になっていけたらいいなと思っております。

増田：分かりました。1つの完全なラウンドテーブル的な、すべての団体が入っている。そのあたりも、後ほど、どうやって一人ひとりのつながり、1つずつの団体がどう連携していきけるのかを議論したいと思います。続きまして、松本さん、よろしく申し上げます。

松本：河内長野市商工会青年部の部長をさせていただいております松本です。私ども商工会青年部が河内長野市のために取り組んでいることは、河内長野市の産業祭の企画をらせていただいて、河内長野を大いに盛り上げていきたいという想いを持って、毎年11月に開催させていただいております。また、青年部として、商品も含めて河内長野の物産などを何とかしていかなければということで、何年前に「ふきやん」というものを青年部で出しまして、そういう商品売って、河内長野を活気を上げていきたいということでやったんですが、なかなか売れ行きはよくなく、失敗と言ってしまってもよいのか分からないですが、そういった経緯もございます。今、商工会自体は「桃ソース」など、商品開発を含めて、商売の点から河内長野のことを考えて進んでいるような状態です。41歳までが青年部の年齢となりまして、僕は39歳なのですが、僕より若い世代もたくさん



いて、正直、まちづくりということに対して、あまり力が入っていなかったのも事実であり、ただ、僕は結婚して、子どももできて、このまちに腰を据えるといいますか、そういう年齢になってきたので、だんだんまちのことを考えるようになってきて、市役所の方で慕っている方がいるんですが、その方にお尻を叩かれて、あんたらがまちのことを考えないでどうすんねんと、そんなことを言っていたきながら、最近ではいろいろなことを、まちのことを考えて青年部活動をしていかなくてはと考えています。来年の春に「カップリングバル」というものを考えていて、河内長野の飲食店などに協力いただきながらカップリングを、そして、河内長野市さんが出していただいている「新婚補助制度」などを利用してもらって、人口を増やすことにも協力できるんじゃないかなと、そういうことを考えたりしております。

増田：大阪商人の言葉に「売り手よし買い手よし世間よし」という、そうじゃないと商売は成立しないということで、やはり商業を成立させるためには、地域がよいということが大事ですので、また後で、河内長野の魅力付けとかブランド化というのはどう考えていったらいいかということで、ご意見をいただきたいと思います。ありがとうございました。最後になりましたが、続きまして、水谷様、よろしく申し上げます。

水谷：水谷と申します。私は、市民ワークショップの参加者としての立場で、みなさまにお話をさせていただきたいと思います。まず、市民ワークショップですが、先ほど、パワーポイントで見ていただいたと思います。林さんからの発表だったんですが、それも含め、こういった市民ワークショップ提言書というものを、市長のほうへ提言させていただきました。中身については、先ほど市の方もおっしゃっていましたが、ホームページで見られます。提言書にメンバーの名簿があるんですが、49名の名前が記載されております。私自身、このワークショップに参加して感じたことは、ワークショップ参加者のみなさんの非常に素晴らしいエネルギーな意欲、そういったものをすごく感じました。また、非常に多様でした。いろいろな立場、先ほど林さんの報告の中にもあったんですが、年齢は20歳台の方から80歳を超えた方もいらっしゃいました。また、今まで活動されていた内容も非常に多様で、5つのグループに分かれて話し合ったんですが、5つのグループに分けるのも大変だったと思います。グループごと、テーマのもとに話し合ったんですが、いろいろな想いが出てきました。その中ですごく感じたのが、その話し合いの中から新しい視点であるとか活動の方向性であるとか、そういったものが相乗効果として出てきたんじゃないかなと思います。いわゆる産業界という異業種間交流の成果のような、そういったものを感じました。このワークショップは、何か組織からの派遣で来られたわけではありません。一人ひとりの熱心な想いから参加してくださったということです。5つのグループで、共通ではないかと思えるのが、場づくりです。活動の場、集まる場、



そういったものがほしいということが出ました。河内長野の大きな施設としては、ここキックスとかラブリーホール、それから、くすのかホールのようなホールがあったり、自治会館があります。そういうものは結構あると思いながらも、でも、やはり、場がほしいという。それを考えると、大きくなくても、私たち市民が、それこそ歩いて行けるような、そういう場所での活動の場というのが、今必要とされているのではないかということを感じました。先ほど、増田先生の話の中にプラットホームという話が出ましたが、もしかすると大きな駅のたくさんのプラットホームがある駅ではなく、小さな、天見とか、ああいいう小さなプラットホームをイメージした、そういう人が集まれる場というものが、河内長野では求められているのではないかと思っています。その集まりにあたっては、ものをつくってただ集まってくださいだけではなく、その場では何かのテーマを持って、例えば、野菜づくり、伝統の味噌づくり、餅づくり、ヤギを飼育しませんか、草刈りを一緒にしませんか、そういったものをもとに集まって、それがずっと継続する、そういう拠点になる場というものができたらいいんじゃないかなと思います。その前に行政に期待することなんですが、最初の出だしの部分だけは、市からのリードといいますか、それをいただきながら、私たち市民が動き出したらと思います。今回の市民ワークショップの参加者の人たちをみていると、本当にエネルギーがあります。活動をどんどん進めていけたら、この河内長野がもっと元気にというテーマの市民になっていくのではないかと考えております。以上です。

増田：ありがとうございます。これは非常に大事なことで、この頃よく「生物多様性」みたいなことを言われますが、我々人間もある一定の年代だけ、一定の業種だけ、一定の背景を持った人だけという画一的になるのが一番まずい方法で、まさにワークショップの中でおっしゃっていただいたような多様性とか異業種間交流とか、そのあたりが次のエネルギーになるという提言をいただいたのではないかなと思います。その中で、後で議論しなければいけないのが、身近なところから、市全体まで含めた活動の場の確保というのは、どうやっていったらいいんだというあたりが共通の議題かと思っていますので、これから議論を深めていきたいと思っています。それでは、大きく3つくらい市長も含めて意見交換をしたいと思っています。1つは、“ほんまもん”という話は先ほどのワークショップの中でありますが、ほんまもんの魅力、ほんまもんの環境、ほんまもんの物産品というものが、どうやって、河内長野にどんな芽があって、魅力再生、魅力創生というのをどう考えていったらいいかというのをみなさんから意見をいただきます。もう1つは、こういう活動をやっていると、吉村さんからいただきましたが、担い手をどう考えていったらいいのかというのと、担い手間の連携とか交流、組織化を、どう考えていったらいいのかという人づくりや組織づくり、議論をする体制だとか、そのあたりについて議論したい。3点目は、そういう担い手の方々が集まれる場、そういう集まれるところをどう確保していったらいいか、そのあたりの3つに絞って議論したいと思いますが、いかがでしょう。まず、河内長野の魅力、魅力の再生をどうやって発信したらいいか、何かアイデアございますか。順番ではなく、どんどんいただきたいんですが、いかがでしょう。何が強みなのか、あるいは、ど

ういうところに芽がありそうか。大谷さん、どうぞ。

大谷：長野小学校区だけに限らせていただいてよろしいですか。活躍している人とか、それから、場所、歴史もたくさんあると思うんですが、それが広報されにくく、調べてないところがあります。私のところでは情報誌を臨時号含めて年に4回、長野小学校の6年生たちに「～ゆめ・街・ながの～」という表題を書いていただいています。子どもから参画をしていただいているということで、情報誌にいろいろな情報を流させてもらおうと考えています。良い団体があって、活躍していただいても、点だけで実際に結ばれていなかったなので、子どもはそのような方法で、少しずつつなげていきたい、広げていきたいと考えています。

増田：分かりました。情報の発信は、非常に大事だと思いますので、この点に関しては、後で市長さんに、長野の魅力をどんな形で情報発信されようとしているのか、どんな方法をお持ちかというのは、聞きますので期待してください。他いかがでしょうか。

松本：失礼があったら申し訳ないですが、僕が思う河内長野の魅力は、「どっちつかず」だと思っています。北海道のような大自然があふれて牧場があって、のんびりできるほど田舎でもなく、大阪市内ほどの都会さはなくて、「どっちつかず」な微妙なポジションが何ともいえず、僕は河内長野の魅力じゃないかなと感じています。

増田：それで何か商売につながりそうですか。

松本：住むには絶妙といえますか、滝畑の方に行けば自然にふれられることがたくさんあって、都会にも、市内に遊びに行くにも全然苦労しない距離です。魅力の伝え方が難しいですが。

増田：これからの観光とか魅力は、「訪れてよし」よりも、「住んでよし」と、それを含めて訪れたいところだというふうに、そういう方向へ変わっていくだろうと思います。だから、住まれている方が、自分の地域に誇りと魅力を感じているのは、観光の基本で、今までの観光とはちょっと変わってきていると思います。そういう意味では、住んで気持ちがいいとか、住み続けたいというのは基本だと思います。他いかがでしょうか、魅力というのは。

吉村：私は、河内長野に来てまだ20年足らずなんです。住んでみて、緑が豊かだし、先ほどもお話がありましたように、朝起きると山が見えて、天気もだいたい予想がつかます。何よりも、今日孫が焼き肉をしに来るんですが、水が美味しい。堺に住んでる子と狭山に住んでる子がおるんですが、「おじいちゃんのところは水がものすごく美味しい」と。何も入れなくても氷さえ入れたら冷たく飲める。これは自然の豊かさの現れの1つだと思います。前に、河内のウォーターを市長さんが東北へたくさん持って行っていただいたと。そういう点で発見すれば、たくさんあるんじゃないかなと思います。住んでみて良さが分かるというのを、どのように他の地域に発信していくか。そして、河内長野の魅力を知っていた

だき、豊富な文化遺産を散策していただいたり。私が小さい頃に、河内長野の駅で降りたら、駅前に売店があったんです。そこでは、河内長野の今で言ったら観葉植物ですね。まだにうちに残っています。先ほども言いましたが、駅前をどのように魅力的なものにしていくか。若者がここに住んでみたいと思えるような、まず、降りて魅力を感じる環境づくりが必要です。併せて、先ほどお話をお聞きしておりましたら、河内長野の商品として20種類ほど出しておられると思いますが、私自身あまりよく知りません。それは、市役所へ行っても見本を置いているわけでもない。あるいは、河内長野の駅を降りたら、それを売っているわけでもない。よその駅と同じものしか売っていない。そういうところがあるので、いろいろと皆さんが感じられることを発信していかないといけない。今日お越しいただいている方に失礼ですが、やはり、若者の意見をどれだけ取り上げて魅力づくりをしていくか。若者が感じている河内長野は魅力がないということを、もっと引き出したり、夢や希望を語る場を多く持って、河内長野を発展させていく必要があると思っています。

増田：水谷さん、何かございますか。

水谷：自然に関しては、皆さんが言ってくださったので、市民ワークショップの代表として、「人」だと言いたいです。ワークショップにも熱心に参加して下さって、しかも、いろいろな活動をされているということは、やはり人がすごいなと思います。それから、若者のことが出ましたが、私の娘はもう所帯を持っており、30代なんです。その年代の河内長野で生まれ育ったお友だちは、一度外へ出ても帰って来たいと言っていると言います。娘もそうで、一旦外へ出ましたが、また戻って来ました。これは何だろうといつも思っています。だから、若い人たちが河内長野を嫌がっているとか、外へ行きたがっているということはないと、私自身は感じています。娘のたくさんのお友だちからは、やっぱり河内長野へ戻って来たいという声を何度も聞きました。ですから、私は未来に希望を持っています。

増田：分かりました。それでは、そろそろ市長さんに、河内長野の魅力をどういうふうプロモーションされるのか、あるいは、情報発信しようと思われているのか、いかがでしょうか。

市長：増田先生の講演会からワークショップの報告、4人のパネリストの言葉を聞いて、皆さん真剣にまちの将来のことを考えていただいて、行政を預かる者としては本当に心強く感じていますし、また、ご参加の皆さん方も同じ想いで、それぞれ、11万人おられると11万人の夢があると思うんですが、それをしっかりとまとめて発信をしていきたいと思っています。

河内長野の良さについての「SWOT分析」というのがありますが、いわゆる、強みは何なのかというのは、先ほども提言にもありましたが、私も同じ考えを持っています。1つは自然の豊かさ、もう1つは、歴史・文化の素晴らしさ。この2つは、多くの人たちが守り育て、継続してきたから今があると思います。我々は、今、21世紀のある部分を生きているわけですが、必ずやこのことは次世代に残さなければいけない、保存しなければ

いけない。もう1つは、それをどう活用するかという2点だと思います。私は、河内長野を代表して、ほかへ行くことがございます。昨日、一昨日も城陽市へ行ってあいさつする時間をいただいたんですが、必ず言うことは2つなんです。1つは「ちかくてふかい奥河内」。河内長野は、先ほど松本君が言ってくれたように、30分行けば滝畑へ、30分行けば難波へ行けます。この近さ。しかし、信州と何ら変わりがない滝畑地域もあります。「ちかくてふかい奥河内」。これは6年前にスタートさせました。南河内だけれども、南河内の一番上手の奥座敷といいますか、上質で上品な奥河内を売り出したいというのが1つ。2つ目は、歴史と文化ということで、皆さんもご存知のように「わがまちに玄理（くろまる）あり」という、どこへ行ってもこの2つは必ず言わせていただいています。玄理（くろまる）に代表するように、河内長野は本当にどの時代で切っても、超一流の歴史があります。我々は当然これを保全し、残さなければいけないんですが、次に続く子どもたちに、このことをしっかりと知ってもらいたいということで、「ふるさと学」を小学校5年、6年、中1で、これも誇りなんです。河内長野市の教員が作ったテキスト、そういう「ふるさと学」というテキストを作って、河内長野全体で教えてもらっています。将来、必ず子どもたちが自らのルーツ、生まれ育った河内長野の良さをしっかりと受け止めて、次のステージで活躍してくれるんじゃないかなと思っています。これは、自己満足なのかというと、そうではないと思うんですね。4年前に教育立市宣言を掲げさせていただき、小中一貫を、かなり早い段階で打ち出させていただきました。ここ1ヶ月ほど前に、安倍首相は同じことをおっしゃっていますね、小中一貫が大事だと。中1ギャップをなくさないといけない。中学1年生で、小学校と中学との教育のあり方の違いで、つまり生徒が多いです。そこで1人になったり、はみ出してしまったりというのがあるので、一貫してやりたい。河内長野の1つの数字ですが、公立中学へ進まないで私立中学へ進学する率が、高いときは15～6%あったんですが、実は、昨年度10%を割りました。これも1つは河内長野が小中一貫を目指そうとしていて、落ち着いた環境の中で9年間学べるから。私は4・3・2制が大切だと思っています。今進めようとしていることは、日本の進むべき道といえますか、少子高齢化もありますし、その中でどう方策をとっていくかということからは、ずれてはいない。しっかりと、その道を進んでいると思います。

あと1点だけ、今年度から組織替えをしまして、都市魅力戦略課とか都市創生課、観光政策課、そういう課に代表されるように組織替えをして、名は体を現すということですから、その課に入った職員は、自分は河内長野の魅力をどう戦略的に推し進めていくかということを考えてもらう課をつくったわけです。行政は、受け身であることが多かったんですが、そうではなくて、自分から河内長野の魅力を発信していこうと、そういう課をつくりました。これがどういう成果を表すかは、幾年かかかるとは思いますが、行政は行政で去年いろいろなことがありましたので、その反省を込めて、新生河内長野を目指して進めていきたい。職員一人ひとりが広報マンであると、私はそう思っております。

増田：ありがとうございます。非常に熱が入って長くなりましたが、よくこんなことを言います。「まちの特徴って何ですか？」と、「駅前と市長の顔だ」という話があるんですね。トップ

セールスは非常に大事ですので、市長さんそのものがトップセールスをやっていたらというのは、1つ大きなことです。もう1つは、観光のベースは、地域外からの観光といっても、まずは市民が市内を観光して見て歩くこと。河内長野に住んでいる人で観心寺に行ったことがない人がいるんじゃないとか、市民が市内を観光することが、まず基本だろうと。その次に、我々の分野で日本庭園などの伝統文化を守っていくときに型（カタ）と流行（ハヤリ）があるんですね。型というのは、今までの伝統をきっちり守っていくというものです。それだけで良さが継続できるかという継続できないんですね。流行という新しい概念を取り込んでいかないと継続できない。先ほども、保護・保全ではなくて活性化とか活用を考えたいとワークショップにありましたが、流行みたいなものをどう導入するのか。こんなことを、是非、市長さんにも考えていただきたいなと思います。だいぶ時間が経っているので、もう1点は2つに分けて聞こうと思っていたんですが、地域で議論をするときの人々の組織とかつながりをどう付けていったらいいかということと、その場所、空間的な場所や施設としてどんな場所が要るかという点を、意見交換させてもらいます。いかがでしょうか。

水谷：人づくりとしては、くろまる塾が、今、熱心に進められています。たくさん生徒さんがいて、学士や博士のようなものを得られた方がたくさんいらっしゃるって、本当に熱心に来られているというのを感じます。つまり、学びたいという気持ちを持っていらっしゃる方が、たくさんいらっしゃるんだということ。そういう人たちの気持ちを活用しない手はないので、大学の後は就職がありますので、くろまる塾を終えられた方の活動の場、いわゆる就職先みたいなものの提供なども期待しております。それと、より深く学びたい人のために、市民大学なども念頭に置いた計画をしていただけたらと思います。学びたい気持ちはたくさん感じる人が多いので、ある意味知的財産といえますか、そういうのが非常にあるんじゃないかなと思います。場所としては、今、空き店舗の利用などがよく言われますが、同時に空き家もあります。先ほど申しましたが、小さな場づくりとしては小さな範囲での空き家の活用ということです。市の空き家の登録制度があると聞いていますが、空き家を活用して、そこでの出会いの場であるとか、活動の場になればいいと思っています。

増田：ありがとうございます。市民大学を受講した卒業生は、受講生から今度は先生に変わってほしいんですね。そうすると、その先生が活躍できる場を行政としてどこかに探してほしいということですね。他いかがでしょうか。松本さん、何かございますか。人づくりとか場づくりをどうやって考えていったらいいか。

松本：何年か前に青年事業者交流会というのをして、僕たち青年部とか若手事業者、いろいろな業種の方と一緒に、異業種交流会みたいなものをさせていただき、そのときは、お菓子の集いだったりカップリングパーティーだったり、いろいろなことができて、いろいろなことが生まれて、非常に良い場を持っていただけたなというのが、場として記憶しています。

増田：分かりました。ありがとうございます。1つの答えは、本当の意味で皆が差を認め合うということだと思うんですね。生物学では、寄生と共生と競合があって、べったり相手にぶら下がるのが寄生ですね。お互いに能力が違う部分、持っている特質が違う部分を協力しますというのが共生です。どちらも蟻だったら、今度は競合が起こってしまいますので、皆各々持っている役割、能力、歴史など違うという差を認め合うことが、多様性を保有することだと思います。

吉村：場づくりという点では、福祉の方では各地域で週に1回、あるいは、月に1回サロンを開いていただいています。その場が1箇所ではなくて、地域の特性を活かしていくつかに分かれて、いつでも利用いただけるサロンがあればいいんじゃないかと思います。食事をしたいときには、そこへ行けば食事ができ、お茶を飲みたいときには行けるというような。私は南花台に住んでいるんですが、南花台に「男談」というのがあります。先ほど先生がおっしゃった共生に値する、それぞれ持っている特性を活かして、退職後の人は余暇の時間が多い、そういうものを活かしながらいきいきと元気に過ごす場づくりが、自然体に各地域で取り組みが始まれば、また違った場づくりになるんじゃないかなと思います。

増田：ありがとうございます。大谷さん、いかがでしょう。まちづくり協議会は、他の面倒を見られているみたいですが、どうでしょう。

大谷：いろいろな方たちといろいろな交流ができるようになって、河内長野の自然や緑の中で人が集えるようになってきて良かったなと思っています。ただ、その中で、私は障がいのある方のお友達が多いものですから、30年来お付き合いしている中で、いろいろなものが恵まれてきました。ただ、2cmの段差があると車椅子は動かない。あともう1つ、私を含めてですが皆にお願いしたいし、心がけていきたいのは、心の2cmの段差をなくしていきたいと思っています。ユニバーサルデザインといって段差をなくしましょう、みんなに使いやすいものをつくりましょうということがありますが、心の段差がなかなかなくなっていくないと思いますので、その段差をなくしていけるようなまちづくりを目指していきたい、それを子どもにつなげていきたいと思っています。

増田：ありがとうございます。市長さん、いかがでしょうか。まさに教育とか人材は大分言っていたので、具体的な活動の場を、市としてはどんな形で準備できそうとか、どんなものを考えていったらいいかというのは、いかがでしょうか。

市長：今、残念ながら人口が減少しておりまして、少子高齢化という問題がございます。これは、河内長野特有の問題ではありません。そういう意味では、今、小学校は13あります。昨年までは14あったわけで、南花台で東小と西小が新たな南花台小学校ということになりました。1つの学校が空いて、そこをどのように使っていこうかということで、地域の皆さんの考えももちろんありますし、また、市としての考えもありますので、今、そこを詰



めています。こういうことが、それぞれの地域で、長野の北の方ではまだまだ難しいんですが、いわゆる空き教室というのができてきます。空き教室は、今もかなりいろいろな学校でご利用いただいているんですが、そういうことがこれからより起こってくるのかなと。それと同時に、ただ空いているから使うということではなくて、コミュニティースクールという制度を2年前から大阪ではじめて取り組んで、それぞれの小学校区で、いわゆる地域の子どもたちの問題点を、先生と親だけではなくて、地域の人、また、専門家にも入っていただいて解決していこうという組織をつくっている最中です。そこを上手くかみ合わせていただいて、場所もあるし、また、ただ使うだけではなくて、自分たちのまちの子どもたち、学校のために自分は何ができるのか、ということも併せて考えていただきたいなと。「してほしい」だけではなく、自分は地域で「何ができるのか」ということを、是非、併せて考えていただければ、もっと小学校を中心に、いいまちづくりができるのかなと。子どもたちも喜ぶし、高齢者の方も、また、お父さん・お母さんも、生きがいややりがいができるんじゃないかと思っています。

増田：ありがとうございます。いろいろなところでストックが出てきますので、そのストックの活用というあたりが1つですし、もう1つは、先ほどの私のプラットフォームとは何かという、これは具体的空間がなくても、パソコン上でもいいです。そのときに大事なのは、議論ばかりしていると疲れますので、議論を何らかの方向へつなげていく、何らかの方向の発地点として使っていただくことが、大事ではないかなと思います。その中で差を認め合うというのは、参画機会の公平さと、情報の格差をなくすということが、皆が参加できるということです。知っている情報量が違うと、一緒に議論できないものですから、やはり情報の格差をなくすということと、参画機会をいかに公平化するかみたいなことも、是非、考えていただきたい。あつという間に1時間が過ぎました。4時ということでお約束をしておりますので、最後にもう一巡、今回の総合計画の中で、こんなことを期待したいというのを、水谷さんから順に言っていて、最後に市長にそれを受け止めて、第5次総合計画をどういうふうに取り組んでいこうかと、答えはこれから探していくわけですが、どういう態度で取り組むかというようなあたりで、最後のまとめをしたいと思います。水谷さん、いかがでしょう。

水谷：先ほど、先生の市民大学の話のときに市民が市民をというお話がありましたが、提言書の中にもあった「育つ場」。育つ場で育った市民は、また次の市民を育てるという、そういう伝える力のあるまちになってほしいと思います。自然を伝える、つまり、伝承のまち、それを市民が市民に伝えていくというまちになってほしいと思います。それと、提言の中にはプロジェクトがいくつもあります。第5次総合計画のときには、是非、このプロジェクトの中で何か実現していただければと思いますので、よろしくお願ひします。

増田：非常に豊かなプロジェクトが提案されておりますし、まんべんなくすべての施策を出すというだけではなくて、重点化が必要でしょうから、そのあたりの議論を深めていければと

思います。松本さん、いかがでしょう。

松本：まず、本日、こうして参加させてもらって、河内長野のことを真剣に考えていらっしゃる方とふれあえたことを嬉しく思います。青年部は若者といってももう中年なんです、若者といっていただけの年代ならではの発想をどんどん出して行って、市に望むだけじゃなくて、市は本当にたくさんの方をさせていただいているので、僕たち若い人間がこれからこのことを考えて、先頭に立ってやっていくぐらいの気持ちでいろいろなことに取り組まなくてはいけないというのを改めて感じました。若いからこそ無邪気な意見もたくさん出ますし、自分たちで話し合いますと無謀なこと、例えば、ロックフェスタやろうぜとか、そういう伝説を新たにつくって人を呼んできた方がいいんじゃないとか、本当に無邪気な意見が僕たちの中では出やすいので、その中で現実化していけるようなことをピックアップしながら、河内長野のために青年という視点からできることを取り組んでいきたいなということを、強く感じました。

増田：どうもありがとうございました。大谷さん、いかがでしょう。

大谷：今、私たちにできることをしっかりと考えて、見据えて、皆と一緒に頑張っていきたいなと思っております。

増田：どうもありがとうございました。最後ですが、吉村さん、いかがでしょう。

吉村：どうしても1つ言っておきたいことがございます。障がいを抱えた人、冷たい言い方ですが、今までは高齢になるまでにお亡くなりになる方が多かったと思います。いろいろな施策の中で、障がいを抱えた方も長生きできる社会・環境ができています。ということは、今後10年間先を見据えた場合に、障がいを抱えた高齢者をどのように我々が支えていけるかということ。是非、障がい者福祉の中で考えていただかなければならないんじゃないかなと思います。併せて、認知症とかいろいろな高齢化の問題がございしますが、今までのように、介護・医療・福祉に頼るだけではなく、地域がそういうものを支え合うようなシステムを作り上げていかなければならないと思います。最後ですが、子どもの遊び場。公園はありますが、子どもたちが魅力を持って集えるようなものを、地域で作り出していけないかなと思います。といいますのは、婦人会などで芋掘りとかむかしあそびとか、いろいろな取り組みをしています。そのときのお話をお聞きしておりましたら、子どもたちがいきいきと楽しんでくれるというようなことをおっしゃっていました。そういう場所が日常的にあればいいなと思います。

増田：ありがとうございました。4人のご発言を受けて、今後の第5次総合計画をまとめていく中での抱負といいますか、方向性みたいなものはいかがでしょうか。

市長：この会に参加させていただいて、本当に皆さん真剣に考えていただいておりますので、我が意を得たりかなと思っているところであります。3つほど説明をさせていただいて、答えにしたいと思うんですが、もちろん、ご提言いただいたことは真剣に考えます。多分、ここに職員もたくさん来ていると思うんですが、今、いろいろな話を伺っていて、実際に行政でやっていることを、今からやりましようと言われたことがいくつもあるんですね。これは何かというと、やはり「見える化」というのができていない。行政マンとしてしっかりと受け止めて、これはやっているんですよ、でも、市民の皆さんがまだ見えていない、または、効果的に見せていないところを、行政に携わる者としてはしっかりと考えていかなければいけないと思います。それから、もう1点は、私は6年前から仕事をさせてもらっているんですが、680億円の借金がありました。国もそうなんです、今は1兆兆を超える借金があって、国はどんどん増やしていますが、我々に対しては非常に厳しいです。3つの経済指標を出してアウトになればレッドカードを突きつけられるわけですが、そういう意味では、70億ほどこの6年間で返しました。先ほど増田先生にもおっしゃっていただいたように、行財政改革をコツコツと真面目にやっています。ということは、新しいことをやるためには、スクラップアンドビルド、どこかを縮小して、どこかをつくっていく。これには知恵が必要なんです。そこは行政だけではできませんので、どうか皆さん方のお力添えをいただきたい。最後に3点目。教育立市宣言の中で、子育てのまちと申しております。これは、できれば30代・40代の人に考えてほしい。河内長野は自然もいい、教育環境も素晴らしい、意識は大阪一です。学力も南大阪では一番です。そういうことを知ってもらい、30代・40代の人に、どこのまちで子育てをするのがいかということを実際に考えていただきたい。そして、河内長野は本当に人材のまちで、高齢者の方も含めて、時間を見つけて見守り隊とかやっております。そこを30代・40代の人に考えてもらわないといけな。安心してお父さん・お母さんが働けるのは、まちの人たちが自分の子どもをしっかりと見守ってくれている。それであれば、是非、時間が空いたとき、土曜や日曜や仕事の手が空いたときは、ねえ、松本さん。まちづくりに、30代・40代の方にもっと関わっていただきたいなと思っております。

増田：ありがとうございます。だいたい時間になりましたが、市長さんからは3つ。1つはちゃんと見える化をしていきますという話、もう1つは財政のさらなる改善の中での選択と集中、最後は福祉。最初に吉村さんの方から面倒をみているのは50代から70代だという話があったんですが、30代から40代の方々にも参画をという強いメッセージをいただいたと思います。ほとんどまとめることはございませんが、私から2〜3点、今日の全体を通じてですが、1つは、今日ずっと脈々と続いている話は、他人事ではなくて一人称としてのまちづくり。自らが何ができるのか、自らが何をしようと思っているのか、受け身ではなくて自らの一人称のまちづくりということが、脈々とあるのではないかと思います。今までは、税金を集めて行政が市民にサービスをする。これからの時代は、そういうことだけではなくて、市民が市民にサービスすることによって、サービスする側も生きがいを感じられるし、サービスを受ける側も非常に温かいサービスを受けることができる。

こんな一人称のまちづくりというのは、今日すごく出ていたのかなと思います。もう1点は、松本さんに代表されるように、若い力といいますか、創造力といいますか、今まではこんなことしたらあかん、あんなことしたらあかんと自縛されているところから、若い人の考え方であったり、あるいは、外部からの刺激があったりして、創造的な発想をやっていきましょうと。クリエイティブシンキングというんですが、創造的な発想で取り組んでいかないと、成熟型社会を全うできないというようなことが2点目です。3点目は、それらが結集した力が地域力だという議論がずっと出てきましたので、いかに地域力がベースにあるか。こんなことで今日の議論、少し不十分でございますが、取りまとめにさせてもらいたいと思っています。本来ならば、会場から意見を取るべきなんですけど、1時間集中した議論をしたかったということから、あえて会場から質問は取りませんでした。不満が残ったかもしれませんが、その分、アンケート用紙の中に十分に書き込んでいただいて、市の方へ提出いただければと思います。長時間にわたってご清聴いただきました。我々としては会場の皆さんに長時間にわたってご清聴いただいたということに対して感謝を申し上げたいと思いますし、会場の皆さん方からは、市長さん含めてパネリストの方々にご発言いただいたということで、お互いに拍手をして終えたいと思います。どうもありがとうございました。